

尾高惇忠(1830-1901)は江戸時代に名主または村主を務めた家の子として、現在の深谷市に生まれた。若い頃から学問に親しみ、長じて自宅を地元の子供たちのため学校へ変えた。10歳年下である従兄弟の渋沢栄一(1840-1931)も学校の生徒であり、数年間生徒として指導を受けた。農民たちと当時の自治体との間で揉め事があった折、惇忠は地域の長として仲介を求めるべく明治政府へ嘆願を行なった。彼は以前に総務省に雇用されていたが、惇忠の知識やリーダーシップに感銘を受けた明治政府は、彼を富岡製糸場の立地選定、建造、運営の責任者に招聘した。惇忠は建築資材の収集を若い頃から尾高家に仕えていた葦塚直次郎(1823-1898)に委ねた。製糸場の外壁は煉瓦で造る予定であったが、当時国内で煉瓦の製造実績はまだなかった。そのため葦塚はフランス人技師と相談のうえ日本の粘土を使って実験を重ねた結果、基準を満たす煉瓦の製造に成功した。その煉瓦は今でも製糸場の外壁として当時のまま使われている。製糸場が無事竣工、稼働がはじまると惇忠は日本人工員の監督となった。彼自身の娘も製糸場の“女工員”として働き、女工たちの教育や福利厚生に尽力した。